

2017年10月
1131号

万葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5
(一冊の会研究室)

平和を唱える人より平和を創る人に

～行動こそ最大の友好の懸け橋～

一冊の会が始まって以来53年間、幾度も新しい事にチャレンジし、未知の世界へ飛び込んで参りました。不思議な事に、思い返せば節目となった日は雨であったことが多く、今思えば“恵みの雨”を幾度も経験してきました。最近では、前号(万葉1130号)でご報告したように南相馬市の植樹の際も大雨でしたし、今では有識者の間で大注目されており一目置かれているブルーの本「1946.4.10 初の婦人参政権行使と日本女性自立への^{たびだち}出発」の出版前、山下泰子先生にこの企画をお話した夏も大雨でした。山下先生は長靴を履いて出てきてくださり「素晴らしいことだから市川房枝基金に応募しなさい、私が推薦文を書いてあげる」とおっしゃってくださいました。

10月15日、憲政記念館の尾崎記念財団応接室で横山信子先生をお迎えして第二章第9回櫻華塾を開催いたしました。秋雨前線の影響で、小雨が降り注ぎまさにめでたい出来事が起きる“^{ずいそう}瑞相”の雨に感じられました。

文化は言葉なり、日本の心を世界へ 横山信子先生

一冊の会を設立して以来、継続して人権・識字教育に取り組んでまいりました。50年目までを第一章と考え、51年目の第二章のスタートに当たり、グローバルな識字活動の実践目標として英語教育を捉えました。櫻華塾で時の流れを学びあい、世界→日本→自分の足元を見つめ、自分に何が出来るのかを問いました。そんな時ご縁があったのでしょうか、今年の9月11日、大槻会長の誕生日にお目にかかったのが横山信子先生です。そして横山先生の誕生日は4月10日と、ブルーの本とのご縁も。大槻会長は横山先生に大いに通じ合えるものを感じ、櫻華塾での講義を是非にとお願いして時間を取っていただきました。先生のお話を抜粋いたします。



横山信子先生

中学校1年生の時、第2次世界大戦時のユダヤ人の少年の話の本に出会いました。これほどまでに寂しく悲しい少年がいるのか、だったらこの少年を日本に連れてきて、日本の言葉や文化を見せてあげたいものだったことが国際交流へのきっかけだった。大学卒業後、世界的にも言語学者の第一人者であるエレナ・ジョーデン先生から「ぜひ米国にいらっしやい」と言われ、思い切って渡米しました。そこで「ASTP方式」という教育方法論に出会い、13年掛かって自分なりの日本語教授法を開発しました。「できた」と思った瞬間、突然の火事により家と共に研究資料が全焼。「すべてはなくなっても私は生きている。私の頭の中に教授法の体系は確立されているのだ」と涙し、生涯この道を全うしますと誓った。時代は日本語を広く世界の人々に分かりやすく教えることを求めている。1988年2月、株式会社日本語教育センターを設立。生命とひきかえにしても完成させて下さいと祈り、出版にこぎつけました。

「日本語で日本語を世界中の人に教えたい」その気持ちは信念になり、いつしかそのことを自らに課された「使命」として人生を全速力で生き抜いて来た横山信子先生。常に自分の信念に対して真正面から向き合い、決して諦めない。その凜とした姿勢は塾生の皆を一瞬にして虜にしました。横山先生が13年間世界中でリサーチし万国共通の絵・図形/位置・数字を使って開発した独自の日本語教授法、横山式ダイレクトメソッド(YDM)。テキスト「見て・きいて・わかる会話式日本語文法」(全7巻)は日本の文化や習慣が理解出来るように工夫されており、YDM教授法を使用することにより、学習者との媒介語を使用することなく、年齢、国籍、性別、日本語学習経験等を問わず全ての外国人に無理なく効果的に日本語を日本語だけで教えることが出来るのです。言語の教授法の世界で常に第一線を歩んで来た横山先生が何よりも大切にしていることは、日本語を教えることで「日本の文化」をも伝承するという事です。文化、つまり日本の「心」を世界中の人に伝えていくことで社会に貢献、国際貢献したいと強く語られました。

また、当日いらっしゃった一色先生が、いつも心に留めているひとつの詩を紹介してくださいました。他の人の役になる人間となる、見返りを求めず笑顔を与えること、それが生きる喜びである、と。

一冊の会はアジア太平洋女性連盟 (FAWA) に参加しており、大変喜ばしいことに近い将来、総会の主催者となる予定もあると伺っております。また持続した被災地支援活動や53年間持続している教育支援活動等、世界に向けて発信していくことの必要性を日々感じております。



一色宏先生

言葉が通じる事は相手の立場を理解し、尊敬する心が芽生えます。日本の心を世界へと、伝承出来る人こそ世界が求める「国際人」なのでしょう。平和活動家であり、一冊の会の永久最高名誉顧問である相馬雪香先生は「世界の中の日本。世界の平和なくして日本の平和なんてありえない」とよく話されていました。

万葉1128号にて既に案内しておりますが、先月、国際的反核キャンペーンの連合体であるICANがノーベル平和賞を受賞しました。一冊の会では創立以来核兵器のない世界を願って、地獄の炎が降った広島・長崎を平和の「震源地」と捉え、毎年8月には被爆体験の「読み聞かせ」活動を持続して参りました。ロイヤルグループ三坂さん、箱根さん、2017年新設したパイオニアグループの横山さんが、No! Atomic Bombsを唱え一冊の会を通じて今後も世界平和を提唱して行きたいと決意の発表をいたしました。平和と人権を守るために草の根で活動を展開している一冊の会の一員であることを自覚し、草の根の団体の集まりであるICANの核兵器廃絶に向けた民衆運動が大きくなうねりとなり世界を動かしたことの意義をかみしめ、核の問題は「国」同士の戦いではなく、私達の生きる権利を獲得する戦いなのだと同再認識しました。

小山副会長から9月28日に東日本大震災の被災地である南相馬市で復興祈念植樹をレソト王国大使館と共にいった報告がありました。万葉1130号でご報告いたしましたが、南相馬市は東日本大震災の折、放射性物質の被害により避難指示が出され、昨年7月市内の大部分が解除されたばかりです。その地で来年開催される全国植樹祭に先立ち復興を象徴する願いをこめた「雪香プロスパーポローニャ」の植樹ができたことは大変喜ばしく、常に時代の先を考え行動をしてきた一冊の会がつかんだ巡りあわせと感じます。被災者は「なんとか立ち上がらないと、新しい未来を私が築くんだ!」という力強い精神を持ち続けています。その強い想いに寄り添い、一冊の会は引き続き植樹を津波被害の各地に続けてまいります。

核兵器のない社会、人権を守り、平和な砦を一人一人が築く為には、異文化同士互いの心を理解し手を携えて共に行動していく必要があります。今回の櫻華塾は「新しい歴史を始める」と意識を高く持つ新生櫻華塾生一同に「恵みの雨」と共に心に大きなそして新たな「潤い」を与えてくれました。この恵みの雨が瑞相となるように、平和と人権の為に持続可能な活動を続けて参りましょう!



“平和を唱える人より平和を創る人に” 行動こそが最大の懸け橋になると信じて!

文責: 城杉 赤田